

自己評価 令和6年度 赤坂台こども園

テーマ「よく見て、よく考えて、なんでもする子」

「たのしいな」

1 年を通して自然に触れ、各年齢の「目標・ねらい」達成のため、担任が「テーマ」を決めて、楽しい取り組みとなるように遊びを進めた。たくさんの物に触れ、発見し、学びにつなげるようにした。

0・1歳の目標・ねらい

- 野外で過ごすことを楽しむ
- 気候の変化や季節の移り変わりを感じる
- 運動機能の発達を促す

ももぐみ(0歳児) 「五感をつかって」

・取り組んだ内容

一年を通して草花、虫、雨、風、光、砂、土などに接し、保育者と一緒に様々な音、形、色、を感じたり、布、おりがみ、画用紙、小麦粉、氷など色々な素材の感触遊びを楽しんで、触れる、見る、聞く、嗅ぐなどの五感を刺激した。

ふれあい遊びとしては、わらべ歌や手遊び、季節の歌などでスキンシップを楽しみ、手先や全身を動かす遊びは何度も繰り返して真似る楽しさを経験した。

手足の力や身体の感覚が発達し、這い這い、つかまり立ち、伝い歩き、一人歩行が出来るようになり自ら感触を楽しんだ。また、人との関わりの中で言葉を知り語彙力も広がった。

・子どもの気づき

色々な草花、虫を見て、色、形や大きさがあることを知り、花や植物のにおいをかいだり、葉っぱの触り心地を感じたりした。また、戸外や室内に入る光を見たり、雨の音を聞いたり、雪に触ったりした。手や目、耳などの体のあらゆる部分で感じ、保育者が言葉で伝える「硬い、柔らかい、冷たい、寒い、暖かい、気持ちいい」という感触を保育者の表情で理解しようとした。初めての経験もあり、個々に反応は違ったが感触というものは感じていた。「大きい、小さい」の大小という違いが小さい子なりに理解していた。成長と共に興味関心はどんどん増えた。

・保育者の援助

色々な感覚を言葉で伝えるだけではなく、身振り手振りでその感触を表現し、できるだけ子どもが特徴を吸収できるようにし、草花、虫、植物などは季節ごとに多く触れるようにした。また、発達に合わせて一人ひとりが楽しめるようにしながら、色の違いや発語に繋がるように言葉を掛けるようにした。ふれあい遊びなどのスキンシップを多く持ち、安心して過ごす中で、色々な感覚に慣れ親しめるようにしたり、違った素材を用意して触るだけではなく物をつまんだり、握ったり出来るようにもした。

・反省 評価

その季節にしか楽しめないことを感じられるようにしたが、季節や子どもの体調を考え、戸外活動を控えることもあり、探索活動の時間が少なかった。新しい物への興味付けも保育者発信だけではなく子どもが自らしようとする姿をもう少し見守るなどして、状況によっては小さい子どもなりにしようとする気持ちを優先することも大切だった。遊びが単発で終わることも多く、繰り返し遊ぶようにしたら子どもの変化や成長をもっと感じる事が出来たのではないかと、担任間でアイディアを出し合うことで、また違った取り組みが出来たのではと思う。

たんぽぽ(1歳児) 「なんのおと」

・取り組んだ内容

音を擬音や模擬音で例えたり、その音を言葉で言ったりした。戸外遊び中は、道路を通る車の音に気づき保育者に知らせる子どももいた。雨の降る日は雨音を聞き、聞こえる音を自分なりに知っている言葉で表現した。給食中は食べることはもちろん咀嚼音のする食材の音にも興味を持った。色々な音に触れるために、ペットボトルなどの容器に砂や石、木の枝などの自然物を入れ、振って遊んだ。自然物(ドングリや落ち葉、石砂、木の枝、木の実など)を使った楽器を作り、音楽に合わせて鳴らすことを楽しんだ。

・子どもの姿

雨音に興味を持つことで「あめザーザー言ってる」と保育者に伝えたり、室内でも「あめ！あめ！」と音を聞いて知らせる子どもがいて、「コロコロ」「カンカン」「ピチャピチャ」と、言葉にして楽しむ姿も増えた。食材の咀嚼音に耳を澄ませ、何度も咀嚼して音を聞いていた。秋の園外散策では自然物を発見し、「どんぐり！」「木あった！」と保育者に伝える姿が見られた。園に持ち帰り、ペットボトルの中に種類ごとに分けて入れ、どんぐりの音や木の音、葉っぱの音などを聞けるようにした。「どんな音かな？」と保育者が聞くと、「ころころ」「カラカラ」と聞こえた音を言葉にして伝えた。またどんぐりころころなど歌に合わせて手作りの楽器遊びを鳴らして楽しんだ。「なんのおと？」の絵本は何度も読んでもらおうと気に入り、読んで欲しいと伝える姿が見られた。保育者がオノマトペを使って音を伝え、「かぜのおと」「たいこのおと」「くるまのおと」と想像して楽しむ姿が見られた。

・保育者の援助

戸外で遊ぶ機会を多く持ち色々な音に注目できるようにしたり、自然物は持ち帰り室内でも見られるように、興味に繋げるようにした。月齢により反応は違ったが、個々の子どもの興味に寄り添い、色々な物に興味を持てるようにしたり、言葉で丁寧に伝えることで色々な言葉に触れられるようにもした。雨音を聞くために、銀トレイに雨を溜め手で触れられるようにしたり、ミルク缶、バケツ、牛乳パックを置いて、雨音の違いを楽しめるようにした。絵本を見る時には、問いかけるなど音を想像できるようにした。「なんのおと？」や「フライパン」などのオノマトペの内容の絵本を取り入れることで、興味を持てるようにした。

・反省 評価

日々の生活や遊びの中で、保育者が音に着目して言葉掛けすることで子ども達からも「○○って言うてる！」という声があった。ペットボトルに石や砂、水、草花など興味をもったものを入れて音を楽しんだり、保育室に持って帰って見れるようにしたが、興味が薄い子どももいたので「○○聞こえるね」と、音に対する興味につなげるようにした。反応が多い子どもの姿には目が行ってしまいがちだったので、一人一人の反応や言葉を見逃さないようにしていくことも大切だった。見つけたものを見せ合うことで同じや一緒に共感したり、大きさや形の違いに気づけるようにもした。子どもの発見や出来たことを認め、自分がするのが楽しい、できたことが嬉しいという思いを大切に、自信を持てるように関わっていくようにした。

2, 3歳の目標・ねらい

- 環境の変化に気づき、興味や関心を持つ
- 体力の増進を図る

ひまわり組(2歳児) 「草花」

・取り組んだ内容

戸外や園外で草花に興味を持ち、より親しめるように保育者と一緒に草花を探し、発見する楽しさを感じた。季節によって咲く草花の違いから四季というものを知った。季節を問わず草花に触れられるようプランターにシロツメ草の種を蒔き育てることで、草を摘んで遊びに使ったりした。色探しや葉っぱじゃんけん、花冠作りなどを通して大きさや長さ、色に関心を持った。

赤坂公園では階段や傾斜のある場所へも積極的に行き、草花探しだけではなく体力づくりもした。

・子ども気づき

目についた草花を摘むことを楽しんだが、初め知らない草花には興味を示さなかった。保育者に繰り返し名前を教えてもらうことで自ら色々な草花を探し、発見したことを保育者や友だちに伝える姿が増えた。草花を摘むことだけに夢中になっていた子どもも、大きさ比べや葉っぱじゃんけんなどのあそびを通して色々な草花に興味を示すようになった。また、葉や花の大きさ、色や茎の長さなどの違いにも気づけるようになった。

公園では存分に走り回り、子ども同士で競争するなど一緒に走る楽しさも経験した。

・保育者の援助

子どもが発見を楽しめるように草花が多くある場所に散策に行き、子ども達が知らない名前を伝えるようにした。見つけた草花を持ち帰り、繰り返し名前を伝えるなど振り返りの時間を作ることで今まで知らなかった草花の名前を知り、草花の名前を知る、覚える嬉しさを感じられるようにした。関心を持って発見を楽しめるよう大きさ比べや葉っぱじゃんけん、花冠などのあそびを取り入れ、一緒にあそぶことで興味を持てるようにした。

公園の階段、坂道は何度も通ることで地形に慣れるだけではなく、子どもたちの体力増進につながった。

・反省 評価

発見を楽しめるよう色々な草花の写真を見たり名前を伝えるようにしたが、季節が進むと草花が減ってしまい興味が薄れてしまう子どもが多かった。いつでも草花に触れられるようにシロツメ草を育てたが、1種類だけだったので別のものも育てるようにすると良かったと思う。

また、公園ではたくさんの草花が生息し、保育者の認識不足があり認知出来ていない草花もあった。持ち帰ってから名前を調べることがあり、事前に調べてから散策する必要があったと感じた。

ばら(3歳児) 「花」

・取り組んだ内容

春は、シロツメクサやタンポポなどの花に触れて匂ったり指輪を作って遊んだ。園の畑にはひまわりの種を植えて、水やり当番をしながら、日々の生長を観察した。芽が出て茎が伸び花が咲いた時は、絵画制作をし花の中のめしべや花びらなども観察した。花が終わり種の収穫して遊びに使った。

寒い時期は水仙・梅の花をオアシスにさして生け花をした。ツバキの花を利用して色水の違いを観察した。

・子ども気づき

赤坂公園でたくさんのシロツメクサやタンポポを見つけて、両手いっぱい摘み満足感を感じた。指輪作りをする中、指輪だけでなく「つなげると長くなる」と首飾りも作って楽しむ姿もあった。タンポポの側に綿毛を見つけ「タンポポの花が綿毛になる」という気づきがあった。

園で育てた「ひまわり」は水やり当番の子どもが「芽が出てる！」「花が咲きそう」と生長の発見をクラスの子どもに伝えていた。ひまわりの花が枯れて、種の収穫をした時「いっぱいつまってるな～」「しましま模様や」とひまわりの種の付き方を知ることができた。

色水遊びは、水に花びらを入れるだけで、水の色が段々と変わる様子に興味を持つ姿があった。ピンク色と赤色のツバキを用意して色の違いを比べた。

・保育者の援助

園外散策で、たくさんのシロツメクサやタンポポが咲いている場所を選んで、観察や遊びに興味がわく声掛けをしたり、指輪のようにつなげて「ネックレス」になる遊びをしていた子どもに褒めたりその楽しさに共感したりした。又、タンポポの綿毛を飛ばすだけでなく、小さな種がついていることに気付けるようにした。花から種になる様子を感じられるように、畑にひまわりの種を植え、水やり当番を通して「大切に育てる」気持ちが持てるようにもした。花が咲いた時は絵画制作で表現して花の中のめしべや花びらなどにも関心が持てるようにした。花が終わり種の収穫をすることで、来年もひまわりの花が咲く事への期待になるようにした。寒い時期は園外散策中ツバキの花を見つけ、花びらを水に付けると色が出ることを知らせて興味を持てるようにした。ツバキの花も 2 種類の色を用意することで色の違いを観察できるようにした。室内でも、花を身近に感じられるようにオアシスを使用し、初めての経験だった子どもたちには優しく扱うように言葉がけをした。

・反省 評価

ひまわりの成長をみんなで観察し、めしべ、おしべというものを知るきっかけが出来た。種まで収穫でき、ある期間持続して取組むことが出来たのが良かった。種の模様など細かいところまで気づくことが出来、その種を植えるとまた花が咲く、というイメージを持つことにも繋がられた。寒い時期に花を発見や触れることは難しく、保育者が用意したものをオアシスに「生け花」をすることにした。子ども達にとって初めての経験で喜んで参加していたが、花のある時期に活動を取り入れていれば、自分で見つけた花を使うことでより楽しめたし、世話もできたのではないと思う。

4, 5歳の目標・ねらい

- 自発的に活動しようとする
- 状況に適応できるようになる
- 身体的バランス能力を育む

あやめ組(4歳児) 「葉と木の実～やがて土へ」

・取り組んだ内容

園庭や公園で色んな葉や木の実を見つけて、形や大きさを見比べたり絵本や図鑑で名前を調べた。葉や木の実でスタンプ遊び、どんぐり回しなどをした。葉の色付きの移り変わりを目で確認しながら友だち同士伝え合ったり、身体全体を使って落ち葉で遊んだ。十分に遊んだ上で、葉や木はやがてどうなるかをみんなで話し合い、畑に『あやめ組じっけんじょう』として土の中に落ち葉や木の実などを埋め、掘り起こすまでの間どうなるかを考えて、意見を発表しあった。その後実際に掘り起こして確かめ、もっと時間が経つとこんな風(腐葉土)になることを知り、触れた。生き物たちが葉を食べて分解して土を作っていくことを絵本で見た。

・子どもの気付き

葉や木の実の形や大きさの違いは絵本や図鑑で名前を知った。スタンプ遊びでは葉脈の形まで出ることに驚き、葉や木の実を組み合わせた製作では、自分がイメージしたものを形作れることの楽しさを感じた。季節の移り変わりと共に葉の色の変化に気付いたり、落ち葉を集めたり寝転んだりして身体全体で遊ぶことで、葉の感触を味わった。どんぐり回しでは、どういう形のものが回りやすく、どういう風にするとよく回るかを何度も試して、友だちや保育者に知らせた。葉や木の実がやがてどうなるかを友だちの意見を聞いて、自分でも考えてみようという気持ちを持った。実際に埋めたものを掘り起こし確かめることで、腐葉土にも興味を持って触れ、やがて土になることを理解した。絵本を通して、生き物たちが葉を分解して土を作っていくことを知った。

・保育者の援助

手づくりポシェットを用意し子どもが自分で見つけた葉や木の実などを自由に集められるようにしたり、絵本や図鑑を読み聞かせ、色んな形や大きさの葉があることや名前を知らせるようにし、興味や関心が持てるようにした。子どもの気付きや発見を他の子どもたちにも伝えていくことで、目を向けられるようにした。並べて大きさや形の違いに気付けるようにラミネートやスタンプをしたり、大きな模造紙を用意し、子どもが葉を組み合わせでイメージしたものを自由に形にして出来上がった嬉しさに共感し満足感を味わえるようにした。どんぐり回しでは、保育者が全て伝えるのではなく、試しながら自分たちでどんなものがかいいか、どういう風にしたらいいかを気付いていけるように、一緒に遊びながら見守った。葉や木の実がやがてどうなるのだろう？という疑問を投げかけて、思ったことを発表し合う時間を持ち、みんなで考えら

れるようにした。実際に埋めてみて、後日掘り起こしたが色の変化はあったものの大きな変化は見られなかったので、市販の腐葉土を見せることで土になっていくことをイメージしたり理解出来たりするようにした。

・反省 評価

戸外へ絵本や図鑑を持って行き見られるようにしたが、実際に取ったものと、じっくり見比べたり調べる時間をもう少し取った方が良かった。保育者が遊びを用意することが多かったので、見つけてきたものを自分たちで工夫して考えて、遊びに取り入れて楽しめる機会をもっと持てるようにした方が良かった。「じっけんじょう」に埋める時期は風が強かったので、日にちに余裕を持って行うようにすれば良かった。期間的に、新しい芽に気付くというところまでいくのは難しかった。

ゆり組(5歳児) 「砂・土であそぼう」

・取り組んだ内容

身近に感じる砂に注目して遊びを始めた。まずは、砂や土の興味づけとして、自分達で遊び方を調べたり、園外のような場所で砂や土に触れ、種類の違いに興味を持った。調べた遊び方で、紙に砂絵を描くなど、紙や水、容器など他の物と組み合わせて遊ぶこともした。砂、土に触れ、色々な遊びの中から「泥団子作りを作ろう」となり泥団子の作り方を調べた。土や砂を色々な場所から集めてきて、土、砂と水の量、力加減など試行錯誤しながら泥団子づくりを楽しんだ。最後には、泥団子づくりについて話し合う機会を持ち、子ども達で意見を出しあい、泥団子づくりについてまとめた。

・子ども気づき

自分達で調べたり、遊んだりしていく中で「こうしたらいいよ」「こうやって握るよ」など、子どもたちなりに遊び方を工夫したり、気付いたことを伝えあう様子があった。泥団子づくりに関しては、作っていく中で土や砂の種類を試していくようになり、園外散策の時や畑での活動の時に、土や砂に触り泥団子が作りやすいかどうかを探すようになってきた。泥団子づくりの過程では、土を固める時のコツや、水の量の加減、さらさらの砂のつくり方やかけ方など自分達で気付いたことを、子ども同士や保育者と共有した。

・保育者の援助

初めの段階で、調べる時の資料集めや遊び方などを提示し、子ども達が興味を持って活動することに繋がるようにした。遊びや泥団子づくりでは子ども達の気づきや経験に合わせて創意工夫できるように、必要な道具の用意としては、さらさらの砂を作るのに小石を取り除きたいと子ども達から意見がでればふるいを準備することとした。また、子ども達の意見や気づきを言い合える機会をつくり、情報を共有することでより、興味や意欲に繋がるようにしていった。最後の

取り組みのまとめでは、子ども同士で意見を言い合う姿があり、話し合う経験が生かされたように思う。

・反省 評価

進級当初活動を始めた頃は、資料を参考にしようとしてもまだ文字を読むことが出来ない子が多かったので、保育者が主体で進める事が多くなってしまった。徐々に字を認識していったので資料などの字を読み理解する姿があった。色々な土や砂の感触を味わい、どの方法、どのように進めるかなどを自身で考える力をつけることは出来たが、野外活動の中で自分達が見つけた自然の土や砂を使う泥団子づくりは、適した土、砂ではなく完成度があまり高くなかった。達成感としては物足りない部分があったかもしれないと感じた。

全体の反省

共通のテーマである「たのしいな」は経験できたと思う。子どもの発言や気づきがあり表情からも楽しんでいる様子が見られた。取り組みの様子を他のクラスの子どもが見て「何しているの?」「どうやっているの?」と近づいて様子を見たり声をかける姿があった。

季節によっては取り組めなかったことの反省については、始める前からある程度は理解の上で進める必要がある。季節の変化を楽しむことは大事ではあるが、活動ができないのならそのことも理解して題材を考えるようにしたい。取り組みに対しての話し合う時間が少なかった。その時間をとることでアイデアを出し合えたのではないかな。

子どもの気づきを保育者がもう少し時間を持って対応すると、子ども自身の学びにつながったのではないかな。どうしても保育者発信になりがちであるので、どの年齢の子どもに対しても子どもからの行動に待つ姿勢を取りたい。

園庭や公園などの開放的な場所で体を動かす、階段・坂道を利用した歩行や斜面のぼりなど、年齢にあった取り組みが出来ていた。リズム運動では「楽しい」だけではなく、運動遊びをしていく中で音を聞く・動く、の集中力や瞬発力、手足の力をつけるなど様々な力をつけることができた。運動遊びの量を少しずつ増やしたり、できた時に褒めることで子ども自身が「出来た!」「楽しい!」と思えもっとやってみようという気持ちにつながることが出来た。